Ⅷ　講評

八幡支援学校の先生方、ありがとうございました

立命館大学　青山　芳文

八幡支援学校の先生方、文部科学省の指定を受けた 2 年間の実践研究、お疲れさまでした。

さて、研究指定を終えた学校ですが、次のどちらかになることが多いようです。

ひとつは、先生方が疲弊して笑顔が消え日々の実践が停滞していく学校。これは、他の学校よりも立派なものを見せようと頑張ってきた学校です。地道な実践家よりも理論家が重用されるようになり、職員室の風通しが悪くなっていきます。

ひとつは、先生方の笑顔が増え日々の実践が豊かになっていく学校。これは、子どもたちとの日常的な関わりを普通に大切にしながら、一歩ずつ授業改善を進め、地道な実践を積み重ねてきた学校です。実践的な研究成果として教育環境の改善が図られ、先生方がより自信と喜びを持って子どもたちと関わり、職員室の風通しが良くなっていきます。

八幡支援学校の先生方、先生方の学校はどちらでしたか？

私はこの 2 年間に計 30 日以上、一日あたり 2～3 教室の授業を参観し、共に授業研究をさせていただきましたが、「日々の授業がますます豊かになっていった」と強く感じています。

1 月 26 日に開催された研究報告会では「八幡支援学校から学びたいこと」というコメントをさせていただきましたので、そのポイントを書きたいと思います。

◇一人一人の共生社会につながる交流及び共同学習

・教室で力をつけてから社会参加する（自立→社会参加）という考え方ではなく、「社会参加（交流及び共同学習や地域と関わる学習活動を含む）の機会を大切にする中で自立の力を高めようとしている。

・交流及び共同学習などをイベント的に実施したり、理解教育推進のために取り組んだりするのではなく、日々の教育活動に位置付けて日常的に取り組んでいる。

> 八幡支援学校は京都八幡高校と併設しているなど、有利な条件にあることは確かです。しかし、条件的に整っていない学校でもこの考え方を大切にして取り組むことができます。

◇毎日の子どもたちとの関わり（教室での日々の教育活動）が学校教育の根幹

・交流や理解教育に力を入れている学校の中にも、授業改善に目が向いていない（特に、教師張り付き型の対応が改善されない）学校も少なくないが、授業改善を強く意識して、日常的に授業公開（対外的にも校内の教員相互も）に積極的に取り組んできた。

・教室環境・授業環境だけではなく人的支援方法の改善が大きく進んできた。
T2が個々の子どもに張り付いて個別に静止したり動かしたりするような授業（一見寄り添っているように見えるが、実は管理教育の典型）から、T1が全員を把握して「子ども自身が分かって動ける」授業（子ども主体の教育への第一歩）に大きく変化してきた。

・「遊びの指導（遊びそのものの活動）」「生活単元学習（本物の生活を題材にした総合的な学習）」

「作業学習（人の役に立つことを意識した作業活動）」など「各教科等を合わせた指導」の中身が充実してきた。さらに、教科別の指導においても、特性に応じた手だてだけではなく「発達」「教科」「集団活動」の視点を踏まえた題材の選択や活動が発展してきた。

子どもたちが最も長時間過ごしている教室での毎日の豊かで確かな学びが大切です。

1970 年代に相次いで開校した京都府の養護学校（現特別支援学校）では、教育の場の整備と子ども集団の力に依拠し発達に応じた教育内容の充実が図られていきました。（この時期には、教員が個々の子どもに張り付いて管理・指導することは考えられませんでした。）

発達に応じた教育内容の開発・充実が一段落し、障害や特性に応じた個別支援の必要性が強調され、教員の定数配置が劇的に改善した 1990 年代以降は、集団指導・個別指導を問わず「教員が個々の子どもに張り付いて指導する」のが養護学校（特別支援学校）の基本だという風潮が広がっていきました。教員集団の高年齢化もそれに拍車をかけていたように思います。

しかし近年、教員の世代交代が急速に進んできました。若手の教員が多数を占める学校では、ベテラン教員が若手のサポートに回り、若手の教員が中心になった学級づくり、授業づくりが始まっており、教務部長や各分掌の責任者の世代交代も進んできました。

その流れの中で、『子ども自身が分かって動ける』環境づくり・学級づくりを大切にし、教員が個々の子どもに張り付いて子どもを動かすのではなく、『子どもの主体的な活動』を具体化する授業づくり（授業改善）が再び進められてきています。また、「各教科等を合わせた指導」に代表される生活に根ざした総合的な学習が大切にされてきています。

八幡支援学校をはじめこうした学校では子どもたちも教員も元気です。

最後に、この 2 年間八幡支援学校の授業づくりの研究に入らせていただく中で、今後ますます充実させ、開発していただきたいと感じていることを整理します。

①指導や支援の前提である「『子ども自身が分かって動ける』環境づくり・学級づくり・授業づくり」をとことん大切にすること
（教員が個々の子どもに張り付いて管理・指導する状態に戻らないよう、常に留意すること。）

②主体的に生きていくための発達の土台の充実のために、小学部では「遊びの活動」を大切にし、さらに発展させること。（教育課程では「遊びの指導」）
（遊びを使った生単や教科指導だけではなく、遊びそのものの活動を豊かに支援すること）

③本物の生活を題材にして活動する総合学習を充実させること（教育課程では生活単元学習）
（進路や地域学習のような「特設生単」だけではなく、日常の生活からの題材や活動内容に広げていくこと）

④中度・重度の子どもたちの意欲と発達の力を充実させる「人の役に立つことを意識した活動」の題材や活動内容を開発し、実践していくこと（教育課程では作業学習）

⑤知識・技能（できること）の観点だけではなく、発達の視点で子どもを理解し、「今持っているどんな力を使って取り組んでいるのか」「どのように分かっているのか」「どのように認識の力が蓄えられていっているのか」を想像し、考えること

2 年間の取り組みの中で進んできた「開かれた（風通しの良い）教室」＝「外から活動が見える教室」「同僚（その学級の担任ではない人）が気兼ねなく意見を言える教師集団」づくりをさらに進め、先生方一人一人が楽しみながら新しい授業を創っていかれることを期待しています。